

【クイア理論と日本文学―世界文学との接点を求めて】

暴力の記憶を〈語る〉ために——目取真俊「眼の奥の森」論

栗山雄佑

現在もなお継続する、名護市辺野古への新基地建設を筆頭とした日本政府、米軍の暴力と、沖縄の抵抗。〈肅々と〉実行される暴力に身悶えし、怒りをたぎらせつつも、その都度必ず立ち返らなければならないことがある。それは、沖縄本島北部に新基地を建設するという行為が、何よりも一九九五年九月四日に同じ本島北部で発生した米軍兵士による少女暴行事件がもたらした傷を再び抉る行為であるということだ。目取真俊は、二〇〇〇年に次のような批判を行っている。

この半世紀余、沖縄にとって絶えず重要な問題であった基地問題にしてもそうだ。本当に声をあげたくてもあげられないのは、軍隊の暴力によって肉体や精神に傷を受け、そのことに苦しみ続けている人たちだろう。基地を受け入れて振興費を引き出す。あるいは、基地を受け入れさせるために振興費をばらまく。この二、三年で沖縄にはそのような風潮が蔓延した。「基地の県内移設」によってもたらされる利益Ⅱ金に群がる者たちは、九五年の九月に何があったか、忘れたのだろうか。いや、忘れた振りをしているのだ。そして、声にならない声が、ますます出にくくしているのだ。^①

「軍隊の暴力によって肉体や精神に傷を受け、そのことに苦しみ続けて

いる人」の「声にならない声」を感知し、進行する暴力に抵抗すること。それは、決して「今オキナワに必要なのは、数千人のデモでもなければ、数万人の集会でもなく、一人のアメリカ人の幼児の死なのだ」^②として、「最低の方法」を想起した「希望」（『朝日新聞』一九九九年六月二六日 夕刊一〇面）を現実にするものであってはならない。私たちに課せられているのは、米軍兵士による性暴力が少女にもたらした傷に對し、それを事後的に想起することではしか接近できないことへのやるせなさを、いかに自分の言葉として語りうるのか、といった課題ではないだろうか。その問題を踏まえつつ、「眼の奥の森」（『季刊前夜』二〇〇四年秋号／二〇〇七年夏号）^③における「声にならない声」への接近の術を考える。

作品で主軸となるのは、沖縄戦時の北部の集落の浜辺で他の少女と共に貝を獲っていた小夜子が、四人の米兵から性暴力を受けた事件、小夜子の隣人である盛治が報復として加害者の米兵の一人に海中にて銛を突き刺した事件である。事件後から現在まで、家族と共に周囲からもたらされる暴力に怯え続ける小夜子、同じく周囲からの不当な扱いに晒されながらも、小夜子への呼びかけを続ける盛治に関する記憶、証言が、元区長の嘉陽、小夜子が集落内の道を走る姿を幻視したことで幼少期に住んでいた島を訪れた久子、久子の友人であり小夜子の事件の際に側にいたフミ、加害者の米兵、加害者の米兵の孫からペンダントを受け取っ

た男性Mよりビデオレターとペンダントを託される沖縄出身の作家、小夜子の妹であるタミコ、タミコから小夜子の話を聞く中学生の少女、当時二つの事件の調査に当たっていた沖縄出身の日系二世の米兵、そして盛治の視点から語られていく。

本論で作品から注目したいのは、「我が声が聞こえるな? 小夜子よ……」との呼びかけから始まる盛治の独白に見られるウチナーヤマト口^⑤に沖縄本島北部の方言のルビを振るといった手法、「いわばさまざまな言語からなる森」などの評価に見られる、二つの事件を語る声の連続から外れた場所に立たされている二人の人物である。その一人が、事件の被害者である小夜子である。事件後、小夜子は事件によって自らに負わされた傷を語ってきた。しかし、それは周囲から「叫び声」や「悲鳴」と見做され理解されることはない。勿論、作中で彼女は終始沈黙を貫いているわけではない。しかし、作品において他者から「アメリカカーにやられて、頭がおかしくなった女」と蔑まれ、抗議や抵抗の意思を示す声は「叫び声」、「悲鳴」としか認識されな^⑥いとき、「『眼の奥の森』は美しい小説である」といった評価は果たして妥当であろうか。

この小夜子の声として認識されない「叫び声」や「悲鳴」、もしくは「聞いている者の心を抉るその声」を上げながら「走り去る後ろ姿」は、作中において幾度も証言者の脳裏によぎる光景として登場する。それは、久子やフミ、通信兵のみならず、沖縄戦記録を集める女性に曖昧な記憶を語った嘉陽が取材後に脳卒中に襲われたときに幻視した「ナエよ」の姿、もしくは盛治に銛で刺された米軍兵士が病床で見た「少女と赤ん坊」にも連続する。彼らの前に浮上した小夜子の姿と声の意味を考える上で注目したいのが、フミが口にした「後ろめた」^⑦いとの言葉である。フミは久子に対し、今まで小夜子のことを「忘れたふり」をしてきたと語り、「三名のアメリカ兵に小学校の女の子が乱暴される事件」によって再び小

夜子のことを思い返し、「小夜子姉さんのことを忘れたふりして、戦争のことを忘れようとして生きてきたことが、何か、とても後ろめたくな^⑧てね」と語る。

フミの「後ろめた」という言葉は、作中の他の人物にも当てはまる言葉でもある。それは、各人が抱く小夜子に対する〈痛み〉を取りまとめる言葉であるが、それ故にこの言葉は、小夜子の姿や声から喚起される自身の加害性の自覚、その自覚からいかに自身の〈生〉を変化させることができるのか、を思考する契機を奪っているのではないだろうか。本論では、この「後ろめた」さを基に、小夜子に加えられた暴力に対する接近の限界から生じた問題について論じていく。

それは、現代の沖縄にて小夜子の妹のタミコから話を聞く女子生徒の存在からも浮上する。講演会にてタミコの話^⑨を熱心に聞いていた女子生徒は、クラスメイトからいじめを受けている。加害生徒達によって、いじめを「あなたのため」の行為と加害行為の意味をすり替えられ、抵抗することを「裏切り」と規定される少女の姿が意味するものとは何か。ここに、小夜子と同様に抵抗や逃亡を呼び込む声を封じ込められた人物の姿が喚起する問題が浮上するのだ。少女はタミコから聞いた小夜子の話から、「両手で耳を押さえ、いつ戸が開けられて米兵達に引きずり出されるかと怯え」る小夜子の姿を想起し、その後学校を早退した女子生徒は、アパートの屋上から「手すりから身を乗り出して」「名前を呼ぶ」女性を発見し、「助けなければ」と考え屋上に駆け上がる。この女子生徒の姿は、果たして「〈弱さ〉を共有」^⑩や「傷を媒介に寄り添い合い、自分の生を倍加」するといった、共感共苦の可能性であったのか。この問題について、少女がタミコと小夜子の幻影に問いかける「そんなにまでして生きないといけないの?」との問いかけを基軸に、少女が二人の女性の姿から見出そうとする「生きないといけない」事由を考えたい。

一、呼び起こされた「後ろめたさ」

冒頭にて示したように、米兵らに暴行された小夜子は実家に引きこもり、度々何かに追われるように自身の身体を傷付けながら叫び声を上げながら集落の外にある森へ逃げる。その姿が、フミや久子、元区長の嘉陽、通訳兵の記憶として、それぞれ一九九五年九月に発生した米兵による少女暴行事件、沖縄戦の聞き取り調査をする女性の訪問、沖縄県による県出身移民の功績の表彰によって再び浮上したことで、彼らは小夜子の事件に立ち返ることになる。その際に生まれるのが、小夜子に対する「後ろめたさ」であるのだ。

勿論、事件当時久子やフミは子どもであり、米軍兵士らの暴力から集落を守る立場にあった嘉陽や、米軍兵士の一員として任務に当たっていた通信兵の限界は念頭に置く必要がある。この限界があったからこそ、彼らは小夜子が上げる「聞いている者の心を抉る」ような「叫び声」「何度も悲鳴を上げ、首筋や肩、胸などを掻きむしり」「陰毛を掻きむしるようにして両手で性器を傷つけ」る行為が意味する、小夜子の身体が示す暴力の傷跡に事後的にしか接近できないという悔恨が生まれていく。

では、彼らは小夜子の姿からいかなる行動を取ることができたのだろうか。米山リサは、「歴史の批判的意識にわたしたちを導くもの」として「起こってしまった後に、「廃墟」としてたどることしかできないものがある、という理解」^⑨を提起する。これを援用するならば、眼前で「叫び声」を上げ何かから逃れるように走り去る小夜子の姿は、見る者に最早事件が起きる前に遡及することができないという前提を踏まえた上で、小夜子の姿とどう向き合うかを各々の立場から思考することを求めるもの、と見ることができだろう。ただ、この観点からそれぞれの行動を見ると、彼らの行動には疑義を呈さざるを得ないのだ。通信兵は、表

彰を推薦した者への返信の中で小夜子と盛治の事件を挙げ、自身を表彰をされるに値しないとす。しかし、彼は「この話は貴方の記憶の中のみ留めておいてほしい」とし、小夜子と盛治の事件を公表しないほしいと記す。それは、インタビューの女性に、自身の話を裏付けるために集落へ訪問することを拒む嘉陽の姿にも連続する。結局、通信兵や嘉陽にとって、事件は戦時に解決した事件であって、小夜子が現在も苦しんでいることへの想起は行われていないのだ。

さらに、小夜子に対する悔恨を口にする久子とフミも、「忘れたふり」をしていた「後ろめたさ」を起点にした自己変化を成し得ない。それは、小夜子の事件に対し報復を行った盛治の存在に起因する。久子とフミの島の再訪は、盛治との再会をも描いている。フミの盛治の行為に対する「私は嬉しくてならなかったさ」との評価、盛治の側で涙を流す久子の姿からは、盛治の報復行為が行われたという事実、両者が抱えていた「後ろめたさ」が仮託されたのではないか、との疑念が浮かぶ。それは、当時盛治の取り調べに関わっていた通信兵にも見られるものだが、久子やフミ、通信兵に去来した「後ろめたさ」さは、一見盛治の行為が併置されることで免責が果たされたかのように映る。ただ、小夜子に対する暴力への報復として米軍兵士を銛で突き刺すという盛治の行為は、決して評価できるものではない。

盛治の行為について、鈴木智之は「語り手の立場や場面に応じて事実隠蔽されたり歪曲され」る作品の中で、「目の背けようのない確かなひとつの出来事、一人の若者の行為が示したまぎれのない「意志」のありか」^⑩として盛治の行為を評価する。これを踏まえると、小夜子に対し「何も出来」ず「後ろめたさ」を抱える者たちとは対照的に、小夜子のために、米軍兵士に立ち向かった盛治の行為は、小夜子が負った傷に真摯に向かい合い、自身に突き付けられた小夜子の傷に事後的にしか接近できな

いという「後ろめた」さを基にした、小夜子に対する自身の「意思」を表明する行為であろう。

その一方で、村上克尚の「傷つけられたものを脇に押しやり、男性たちのあいだで諮られるそのような解決法は、きわめて男性主義的である」^⑪との指摘、村上陽子の「盛治の決起もまた、集落の女性を守る〈強い男〉としての自分を小夜子や集落の人々に認めさせたいという欲望に支えられている」^⑫との批判にあるように、盛治の行為は小夜子の被害を介して自身への「薄馬鹿」^ととの評価を覆し、集落内における優位性を会得しようとするものである。そのとき、小夜子に性暴力が加えられたという事態は、盛治にとって「集落の女性を守る〈強い男〉としての自分を小夜子や集落の人々に認めさせたいという欲望」を満たす手段としか位置付けられていない。このような盛治の思考法は、九五年の事件に対抗暴力にて応答しようとした「希望」の主人公、同様に九五年の事件の裏で複層的に折り重なった暴力に対抗暴力による現状打破を渴望する「虹の鳥」(『小説Tripper』二〇〇四年冬季号)の主人公から連続する問題でもある。三作品に通底する報復行為は、一見性暴力の被害から生まれた非暴力的抵抗の限界に対するオルタナティブな選択として提起されたように見える。だが、盛治の姿から窺えるように、それは女性に対する性暴力を利用して自らの優位性を作品空間内に確保しようとする欲望の発露^⑬でしかない。この事実を踏まえれば、鈴木のように「一人の若者の行為が示したまぎれのない「意志」」を評価することは、盛治が目論む自らの優位性の確保の手立てに加担することにつながるのだ。

このような欲望を内在させたまま、盛治は今も「我は今も、お前のことを思っておるよ……(略)我が声が、聞こえるか、小夜子……」と呼びかけを続ける。この呼びかけに対し、作中では小夜子が「聞こえるよ、セイジ」と応答をしているかのように見える。この描写に、「読者に感動

を与えないでおかない」^⑭などの評価があるのだが、この盛治の呼びかけに対する小夜子の〈応答〉を傍らで聞いていた小夜子の妹、タミコに注目したい。小夜子の見舞いに来ていたタミコは、この小夜子の「セイジ」という言葉を盛治に結びつけていない。作中でタミコは、事件後から現在まで、自身や小夜子を含む家族が周囲からの視線や声に怯えてきたこと、家から出られなくなった小夜子が自身にもたらされた傷にいかんが苦しみか、それを間近で見てきた父母の行為に対する憎しみ、姉の苦しみから逃げ続けてきた自身の卑怯さを明かしている。しかし、タミコは隣家に住んでいたはずの盛治について、作中にて一切語ることはない。この盛治に対するタミコの黙殺は、いかなる意味を持つのか。

ここまでの指摘を踏まえれば、多くの者が口にする小夜子への「後ろめた」さとは、結局作中において彼女の姿から生じた様々な感情が発露できないまま、宙吊りに置かれている状態を意味する言葉となる。それは、タミコの小夜子から「逃げ続けてきた」悔恨、他の者と同様に小夜子が自身に何を伝えようとしているのかを把握できないことを意味する。しかし、タミコは小夜子の姿から自身に突きつけられたもの、亡くなるまで「怒りや嫌悪、蔑み、憎しみ、あらゆる負の感情が込められたような冷たい眼差し」を小夜子に向けていた父、「いつも姉さんことばかり、私達のことは考えない」母の姿から到来した幾多の感情が、決して加害者に対する暴力を介した報復では済まされないことを認識している。その認識の過程として表出しているのが、事件後から集落の者たちの眼差しや囁き声に感じていた「ぬめぬめ」という感覚であり、さらには父母の行動や自身の「逃げ続けてきた」行動から生じた、やり場のない「憎しみ」の自覚である。これらの感覚、感情について、タミコはそれを盛治の報復に仮託し解消することなく、自らの言葉によって表出しようとする。その試みとして、介護施設で小夜子が描く「どれも重く

暗い色調で、濃い緑や青、紫が何度も塗り重ねられ、深い森の奥のよう」な三枚の絵画への向き合いが描かれている。

タミコは、三枚の絵画が意味するものを類推する中で、「不安」や「気味悪さ」を想起し、あるいは「二つの奇妙な形」を小夜子と彼女が出産した子どもと類推する。勿論、これらの絵画が意味するものをタミコが理解できてはいないし、論者もまたタミコによる描写からその絵画を類推するしかない。ただ、「黒のクレヨン」を執拗に塗った「黒い穴」「濃い赤のクレヨン」を何十回もぐるぐると塗り回したような「赤い円」は、小夜子の幻影が各人に喚起したように、小夜子に加えられた暴力が現在にまで継続し、安易な解決ができないことを示すものである。このように考えるならば、小夜子が描いた絵画はその解釈の困難さを基に、小夜子の身体、声から浮上するものを自己の問題として引き受ける術をタミコに問う。これについて、タミコは小夜子の苦しみを彼女が出産後に取り上げられた「赤ん坊」の存在から考えようとし、その思索の言語化として、中学校での沖縄戦体験の講演において小夜子のことを生徒に伝えようとする行為として結実する。このタミコの話に内包される問題、それを聴き受ける一人の少女については次章で論じるが、彼女が長年向かい続けてきた「後ろめたさ」はこのような思索によって一つの方向性を持つ。それは、盛治が提起した報復行為という応答に対し、再び沖縄を戦時空間に変貌させ、小夜子のような性暴力被害者が生まれることを予期し、何よりも一人の女性に加えられた性暴力が報復行為によって解決などし得ないとして、決然と黙殺しているのだ。ここに、「攻撃へと傾倒する人々と、その攻撃性を反復することなく闘¹⁵」う術として、さらには「暴力より非暴力の方が効果的であり、暴力は有効な手段ではない」という、きわめて政治的な信条¹⁶による、「本当に声をあげたくてもあげられない」人の苦しみへの思索が提起されていたのだ。

二、現代の沖縄で小夜子を想起すること

タミコは講演後、一番前に座り熱心に自身の話を聴いていた少女に「あなたが一番前で熱心に聴いてくれたから、ほんとに嬉しかったし、話を続ける勇気が出て、助かったさ」と話しかけ、「彼女の心に、いや彼女だけでなく他の生徒達の心にも、自分の言葉がいくらかでも届いてくれていたら……」と思いつつ中学校を後にする。だが、この少女はクラス内でのいじめの一環として、**¹⁷からの命令に従い一番前で話を聴いていただけであった。

この事実に限らず、少女の姿を描く章ではクラス内での少女に対する苛烈ないじめの光景が描写されている。その中で注目したいのが、加害生徒達が巧妙にいじめという暴力を「あなたのため」に行っているとのレトリックを駆使することである。例えば、少女が汚れた雑巾でわざと机を拭いたと言いがかりをつけたときには、「そうやってすぐに黙るんだから。悪いことをしても謝らないから嫌われるんだよ」「みんなあなたのことを思っ¹⁸て注意してるのに」と言いつのり、その後、少女に数名の唾を入れたオレンジジュースを無理やり飲ませ、少女が嘔吐した際には「みんなの友情を裏切ったんだよね」などと少女を責め立てる。このように加害生徒達は、少女の尊厳を奪う暴力を（劣等）である少女を自身と同等の存在へと（矯正）する「友情」による「親切」と定義し、それに対する「裏切り」としての抵抗を認めないのだ。この論理は、鈴木が示唆する「暴力の標的から（声）を奪い取ることによって達成される、暴力の支配¹⁹」であり、それは浅野千恵による「無意味状態——すなわち、暴力状態——が、むしろ解放された状態であるかのような錯覚や転倒を引き起こす」状況の中で「言葉は、暴力の必然性や正当性を語るための道具に貶められる¹⁹」との指摘に連続する。いじめという暴力がもたらした

論理の転倒の中で、言葉は少女への加害を増幅させる道具として機能している。その中で、本来少女が持っていた暴力への抵抗を表明するための〈声〉は彼女からは奪われているのだ。

このような状況の中で少女は、保健室にてタミコの話を思い返しなが
ら「暗い押入の中」で「いつ米兵達に引きずり出されるか」と「小さな
生き物に変わろうとでもするかのように背中を丸めて縮こまって」怯え
ている「十七、八歳のお姉さん」の姿を想起し、その姿、そしてタミコ
へ次のように問いかける。

南部の病院で海を見ているお姉さんという人は、生きていて楽し
かったの？ 子どもを取り上げられて、ずっと家に引き籠っていて、
毎日ミシンに向かって洋裁をして、それで楽しかったの？ 本当は
毎日苦しくてたまらなかつたんじゃないの？ 死にたかつたけど死
ねなかつただけじゃないの？ 話をしてくれた女の人に訊ねたかつ
た。そんなにまでして生きないといけないの？

その問いかけには、加害生徒達による「生きていたくなかつたら、死
んだら。誰も悲しまないよ。泣く人だつて一人もいないはずよ」との声
の想起が重ねられていくのだが、この「そんなにまでして生きないとい
けないの？」との問いかけに立ち止まってみたい。少女は、自身の生が
「外に出ることもできなくなつて、ずっと家に引き籠って生きていくしか
ない」ものになることを予期しつつ、自死を選んだとしても「誰も悲し
まない」とも考えている。しかし少女は、帰途に三ヶ月前に女性が飛び
降りたアパートの前を通りがかつた際、アスファルトに残った女性の血
痕と、アパートの屋上から飛び降りようとする女性の幻影を見る。その
幻影を見た瞬間、少女は「止めなければ」と考え屋上まで階段を駆け上

がる。自死しても「誰も悲しまない」と考え「そんなにまでして生きな
いといけないの？」と問いかける少女が、アパートの屋上から飛び降り
ようとする女性の幻影を「止めなければ」と考え、行動したことに、い
かなる意味があるのだろうか。

ただし、この問いは、少女が小夜子、もしくは飛び降りた女性が負つ
た傷を理解し共感共苦を行った、との見立てを慎重に排するものである。
例えば、鈴木は中学校でいじめられているという「位置を強いられる
彼女だけが、「島」での「出来事」を真に聞くことができ」とし、か
つ「踊り場から飛び降りようとしている「女」の声を聞くことができ」
ると述べる。鈴木は、その理由を「それぞれの出来事において苦しみ続
ける「女」たちが、構造的に強いられている〈弱さ〉を共有しているか
ら」^{②①}とするが、少女と女性、小夜子は果たして互いの「〈弱さ〉」を共有
しているのだろうか。また村上克尚は、「傷つけられたものたちが、その
傷を媒介に寄り添い合い、自分の生を倍加していく」ことに「波及する
戦争に抵抗していくという可能性^{②②}があると述べる。それは村上陽子の「小
夜子の痛みを感じ取ろうとする存在」と位置付けた上で、少女を「虐げ
られた者が抵抗としての暴力を発動させることに共鳴するのではないか
たちで、小夜子の痛みが語られ、受け渡される可能性を示している」^{②③}と
する指摘にも連なる。三者の見立ては、一見少女が多層的に折り重なる
小夜子への暴力、理由も推測できない女性を自死に追い込んだ〈何か〉
を看取し、その傷の痛みへの共感が行われたと想起し、その〈連帯〉に
新たな抵抗の可能性を提起するものであろう。

しかし、三者が自明とする「苦しみ続ける「女」たち」というジェン
ダー観に基づいた共感共苦の見立てについては引つ掛かりを覚える。岡
野八代は、「被傷性・傷つきやすさを、まずはしっかりと認めること」を
自明の事実としつつ、「すべての者が同じように、傷つきやすいということ

を意味しない」と指摘する。岡野の指摘にあるように、作中において少女と小夜子、女性が負った暴力の傷は個別性を持つ。講演で小夜子のことを話したタミコも、小夜子が米軍兵士や集落の者たち、自身を含む家族から加えられた暴力の痕跡について完全に理解し得ないからこそ、苦悩し「赤ん坊」の存在から小夜子の心情を推測するしかないのだ。何よりも、「虹の鳥」では、女子生徒が少女に対し「外からは見えない腹や背中を蹴り、腿の付け根にタバコの火を押しつけ」、「男たちに黽らせたあと、ハンカチに一包みの小石を性器に詰め込」むという暴力を行っていた。「虹の鳥」から「眼の奥の森」にまで継続するのは、盛治のような対抗暴力に希望を見出す者の虚妄だけでなく、少女をいじめる同級生が*とされるように、男性が加害者側に立ち、女性同士はその暴力の傷を理解し合える、というジェンダー規範に基づいた見立てが最早通用しないことであるのだ。

この前提を踏まえつつ、少女が想起した二人の女性を考えると、双方ともにこの章において少女にしか顧みられない存在であることに注目したい。小夜子に関する話は、少女以外の大半の生徒にとって「退屈」な沖縄戦の講演の一部にしか過ぎないし、アパートから飛び降りた女性が地面に残した血痕も、アパートの管理人によって消去されようとしている。しかし、少女は小夜子の姿を想起した上で自身の境遇と重ね合わせ、女性が地面に遺した血痕を見出す。この少女が見出した二つの痕跡は、前章で論じた小夜子の「叫び声」や身体の幻影、タミコが目にした小夜子の絵画と同様に、少女に何らかの〈声〉を届けようとするものである。この二人の女性の〈生〉の痕跡を介して、少女は自身が置かれている「死にたかっただけ死ねな」い状態、もしくは暴力に苦しみながらも「生きないといけない」理由を見出そうとする。そのときに、次に挙げる暴力を誘発する一つの身体の状態に関する指摘を見ておきたい。

アルフォンソ・リングスは、「暴力に駆り立てるものは、ひとりの人間の強靱さや力ではなく、むしろ他者の弱さ」であるとした上で、その暴力を誘発、連環させていくものとして「屍体」が「あらたな屍体を生む暴力の引き金」になり、さらには暴力が「屍体の姿や、生きた身体のかなかに屍体を予見すること」²⁵によって激化することを指摘する。この指摘が提示したのは、生きているのにも関わらず「身体のかなかに屍体を予見され」ることが暴力を誘発し、連環していくことへの批判である。先程見たように、少女はいじめの加害者たちから死んだとしても「誰も悲しまない」存在として見做されている。つまり、少女が抵抗を見せない「屍体」である限り、加害生徒は少女から自身の「弱さ」を突き付けられ、さらなるいじめという暴力を加速させていくのだ。

その一方で、「屍体」の存在が「他者の弱さ」を喚起するのであれば、「屍体」であり続けることは加害者の内部にある「弱さ」への審問を突きつけるものとして考えることも可能だろう。このように考えるならば、少女が自らが「屍体」として生きること自体が、加害生徒達への抵抗となりうる、との発想が「生きないといけない」理由となるように思える。だが、このような〈生〉は、少女への暴力を容認し彼女を更に傷つけるものであることは言うまでもないし、何よりも加害者の「弱さ」を攻撃することは、タミコが講演内で排した暴力による報復を意味するものとなる。暴力によって傷付けられている身体とは、その傷を語るための言葉を奪われた者の〈生〉を語るものであると同時に、その身体が暴力をこれ以上呼び込むものとなつてはならないものである。この「屍体」から喚起される暴力性を、少女は飛び降りた女性から、もしくは自身に再び到来した他者からの暴力を介して看取し、その上で一つの事項を見出すのだ。

少女は、「手すりから身を乗り出して」自分の名前を呼ぶ「若い女の

人」の姿を見た瞬間、「止めなければ」との思いに駆られて屋上まで駆け上がる。屋上に駆け上がった少女は、そこに「枯れかけた白い菊の花束」が隅に「吹き寄せられているよう」に落ち、屋上から見た染みに「仰向けになって体が奇妙な形でよじれている若い女の人の姿」を見る。この二つのものは、女性が屋上から飛び降り、死を迎えたことを確証に導くものである。そのとき、少女の行為は「われわれは行動させられる、それも暴力的に」といったバトラーの言葉の通り、血痕と自身の名前を呼ぶ声に引き寄せられるように行動させられたと見ることも可能になるかもしれない。だが、バトラーは行動が「暴力的に」実行される中で、「暴力的な傷にどう応答するかを倫理的に問うことを迫られる」として次の提起を行う。

暴力の歴史的連鎖のなかで、私たちにどんな役割が与えられるのか、そのような応答をなすなかで私たちは何者になるのか、そして私たちは自らが行う応答の力によって、暴力を増幅させるのか、あるいは防ぐのか？ 暴力に暴力を以て応じることは「正当化される」ように思えるかもしれないが、それは究極のところ応答責任を果たす行いののだろうか？²⁶

この言葉を援用すると、少女は血痕や声に誘引されて屋上に駆け上がることで、飛び降りた女性が自身に階段を駆け上がり自殺を止めるという行動を暴力的に誘発する「屍者」であることを踏まえた上で、その女性が死を悼まない「屍者」ではない、何者かから悼まれている「死者」であることを発見する。このとき、少女は女性の幻影が生み出した行動を通じて、自らが「屍体」であり続けることが「自らの敵がこのような亡霊として無限に生き続けているという理由によって」暴力を誘発する

こと、それを停止するためには「永久に亡霊の状態にいる」²⁷生が悼まれることが必要であることを見出そうとするのだ。

更に少女は、飛び降りた女性を悼む痕跡を見た直後、少女が自殺しようとしていると勘違いした「四十歳前後の小柄な男」に抱きつかれようとする。「思わず体をよけて男を突き飛ばした」少女は、「何するんだ馬鹿野郎、人が心配して助けてやろうとしたのに」といった男の怒りを呼び込み、逃げる背中にコンクリートの塊をぶつけられそうになる。少女を助ける目的で「抱きつ」く行為を少女が「突き飛ば」すとの抵抗を見せたことで、「親切」を「裏切」った少女への暴力を正当化する男性から、少女は他者からの暴力を呼び込む自身の被傷性^{ヴァレオツリテイ}を踏まえた上で、自身に加えられた暴力の傷という生の痕跡によって暴力を非暴力的に停止するために、「生きないといけない」という状況を看取する。

この観点を、少女は小夜子の姿の想起、さらには飛び降りようとする女性から感知しようとしたのだ。それは、決して「〈弱さ〉を共有している」という傷の代理表象を自明とするのでも、「自分の生を倍加していく」との他者の生を自己に取り込むという暴力性をもたらしものではない。少女が前提とするのは、新城郁夫が指摘する次の視点である。新城は、沖縄内で「軍事的政治的覇権という暴力の構造を自らに既に深く取り込みつつ生きていることを認識」し、「戦争は私たちの心身を貫く形で常に私たちの心身において生起しているものであり、このことは、私たちの生の条件をなしてさえない」とした上で、「しかしこの暴力の構造のなかにある生こそが、非暴力の可能性の条件となる」と指摘する²⁸。この指摘にあるように、少女もいじめという暴力への拒絶として「唾入りのオレンジジュース」を嘔吐し、自身を助けようとした男性を「突き飛ば」すという加害者に対する「暴力性」を内在させている。その事実を踏まえた上で、少女は自身を取り巻く「心身を貫く形で常に私たちの心身に

おいて生起し」、「生の条件をなしてさえる」暴力の存在を認めつつ、その暴力に晒される生を以て「非暴力の可能性」を見出すために「屍体」の状態を生きていることを「止めなければ」と考えているのだ。勿論、この提起は実現が困難な条件を持つものであるうし、あまつさえ暴力を被る生を受忍せよ、との観点を呼び込むだろう。しかし、暴力を誘引する「屍体」としての生を見つめ直し、その転換を以て「屍体」を「死者」として悼むこと、連環する暴力を非暴力的な手法で停止すること、この可能性を見出すために少女は「生きないといけない」し、加害者から奪われた声を自らの力で取り戻さなければならぬのだ。

三、〈無関心・無感動〉という暴力性に向けて

以上のように、小夜子と中学生の少女の姿から、作中に通底する暴力を被った身体が意味するものへの接近、個々人に内在する暴力性の自覚とそれを基にした非暴力的な暴力の停止の方策を提起した。この提起は、一見作中で有用な方策として位置付けられていたかのように見える盛治の報復行為が、その実において暴力を停止し得ないことを示すとともに、最早小夜子や少女のように傷付けられた身体でしか暴力の傷の痛みを語り得ない、との状況をも明らかにするのだ。

この状況を確認しつつ、結論として一つの問題を考えておきたい。それは、作品において直面する暴力とは、性暴力や侮蔑といったもの以上に、小夜子や盛治の事件に対する〈無関心・無感動〉な態度を見せる人物の存在ではないだろうか。本論が批判した、盛治の行為に米軍の暴力への抵抗を見出す指摘、小夜子の暴力の記憶がタミコや少女に受け継がれると考える指摘は、作品に一つの〈感動〉を見出し、その〈感動〉を基に盛治や小夜子の記憶が伝達されることを期している。しかし、作品

は作中で構築されようとする〈感動〉を幾度も突き崩していく。それを招くのが、小夜子や盛治、少女に苛烈な暴力を振るいつつ、言葉でもってその暴力性を覆い隠す者達の存在である。

少女およびタミコを中心にした章では、タミコに「本当に大変な体験をされたんですね。私たちが平和を守っていかねばと思いました」と話しかける女子生徒達が描かれる。彼女らの声を聞きながら少女が「心にもないことを言って」と感じたように、彼女らこそが少女に苛烈な暴力を振るう当事者**であるのだ。タミコの話聞くことを少女に強制し、講演後もいじめを続ける者達にとつて、タミコが話した小夜子の話は何ら関心や感動を喚起させるものではない。それを端的に示すのが、少女に対するタミコの話「熱心に聞いているふりをしろ」という命令であろう。この行為は、反戦平和を願うタミコの話が、加害生徒達によって少女へのいじめを行うための道具として利用されていたことを示す。このような転倒を内包しつつも、加害生徒達の「平和を守っていかねば」との言葉はタミコに対し説得力を持つ。そのとき、作品が提起する問題は「希望」の中で主人公の行為を「ただでさえ儲かんのによ、これで観光客がよけいに来なくなったらどうするか」と事件を矮小化する者の問題へ再び立ち返っていくのだ。

この〈無関心・無感動〉な者の存在が、冒頭に提示した本島北部に米軍の新基地を建設するという行為を導く。本論で批判した盛治の行為も、多々の問題を含みつつも小夜子に対する性暴力という事件に、怒りという感情でもって反応したものであった。その一方で、小夜子や盛治の存在を「忘れた振り」によって黙殺し、「肉体や精神に傷を受け、そのことに苦しみ続けている人たち」の声を奪いつつ「平和を守っていかねば」などと口にする者の存在に、「希望」から「眼の奥の森」に至る暴力の主眼は置かれてきたのだ。それを示すのが、少女が自らにブロックの

塊をぶつけようとした男性から逃れた後に、自宅の玄関先で「心の底に小さなサンゴの枝のようなものがあって、それが踏みしだかれて折れていく音」を聞きつつ、タミコの「あなた達には幸せであってほしいと願うさ」との言葉を思い返し涙する場面であろう。少女にとって、「幸せ」との言葉は最早何ら希望をもたらさない空疎な言葉でしかないものの、暴力を蒙り続ける現状の中で絶る希望を示す言葉でもある。このように作品は、言葉の意味を幾度も転倒させながら、少女や小夜子のように「声にならない声」を持つ者が「生きないといけない」事由を提示しようとする。その糸口を探索しつつ、小夜子や盛治をめぐる各人物の証言が喚起する〈感動〉を無批判なままに摂取するのではなく、声や感情さえも略取する暴力の存在を念頭に置きながら、その暴力を非暴力的に対置する術を探ることこそが、「眼の奥の森」や冒頭に挙げた目取真の提起への応答なりうるのだ。

注

- ① 目取真俊「小さくても大切な声」『琉球新報』二〇〇〇年二月二日（本論は『沖繩／草の声・根の意志』世織書房 二一七頁二〇〇一年九月収録版を用いた。）
- ② 初出は『朝日新聞』一九九九年六月二六日。本稿では、『目取真俊短編小説選集三 面影と連れて』（影書房 二〇一三年一月）収録版を用いた。なお太字は本文ママ。
- ③ 『前夜』創刊号に掲載された第一回は単行本に収録されず、後年発行された『目取真俊短編小説選集三』に「ホテル火」と改題されて収録された。内容は、一人の少女と集落から隔離されたハンセン病と思わしき親子との交流を描いたものである。
- ④ タクマ・スミンキーは本作品の英訳（『In The Woods Of Memory』 translated by Takuma Sminkey Stone Bridge Press 二〇一七年六月）を行う上で、作品の舞台を屋我地島とした。

暴力の記憶を〈語る〉ために——目取真俊「眼の奥の森」論

- ⑤ 越川芳明「森の洞窟に響け、ウチナーの声」『小説トリッパー』二〇〇九年冬季号 朝日新聞社 二〇〇九年二月一六日 四三六頁
- ⑥ 鈴木智之「輻輳する記憶——『眼の奥の森』における〈ヴィジョン〉の獲得と〈声〉の回帰」『眼の奥に突き立てられた言葉の銛——目取真俊の〈文学〉と沖繩戦の記憶』晶文社 二〇一三年三月 一四六頁
- ⑦ 注⑥に同じ一八六頁
- ⑧ 村上克尚「波及する戦争——目取真俊『眼の奥の森』を読むために」『越境広場』四号 越境広場刊行委員会 二〇一七年二月三一四頁
- ⑨ 米山リサ（小澤祥子／小田島勝浩 訳）「二つの廃墟を越えて——広島、世界貿易センター、日本軍「慰安所」をめぐる記憶のポリティクス」ひろたまさき・キャロル・グラック（監修）富山一郎（編）『記憶が語りはじめる』東京大学出版会 二〇〇六年二月一五三―一五四頁
- ⑩ 注⑥に同じ一四八頁
- ⑪ 注⑧に同じ三二頁
- ⑫ 村上陽子「暴力によらない抵抗の回路を開く——目取真俊『眼の奥の森』をめぐる」『福音と世界』二〇一九年九月号 新教出版社 二〇一九年九月。三四頁。また、カイル・イケダも村上克尚、村上陽子と同様に盛治の行為から「女性を男性の「財産」と見做すかのような男性的、民族主義的セクシュアリティ」を指摘する。（『Multisensory memory and sites of trauma in Forest at the Back of My Eye, Okinawa War memory Transgenerational trauma and the war fiction of Medoruma Shun Routledge 二〇一三年二月 引用は拙訳に拠る』）
- ⑬ 「希望」については、新城郁夫「沖繩の政治的主体化と対抗暴力「沖繩イニシアティブ」と「希望」」（『沖繩を聞く』みすず書房 二〇一〇年十二月）、鄭柚鎮「安保の問題を女の問題として矮小化するな」という主張をめぐるある政治―感情問題をめぐる政治の葛藤、あるいは葛藤という政治」（富山一郎／森宣雄『現代沖繩の歴史経験 希望、あるいは未決性について』青弓社 二〇一〇年七月）、拙論「目取真俊「希望」論―動員される少女の被害について」（『立命館文学』六五二号 立命館大学人文学会 二〇一七年八月）、「虹の鳥」については拙論「誰がために〈怒り〉を表明するのか——目取真俊『虹の鳥』論」（『社会文学』五〇号 日本社

会文学会 二〇一九年八月)にて、対抗暴力による性暴力への応答の問題性を指摘している。

⑭ 注⑤に同じ

⑮ ジュデイス・バトラー(本莊至 訳)「非暴力、哀悼可能性、個人主義批判」『現代思想』二〇一九年三月臨時増刊号 青土社 二〇一九年二月四五頁

⑯ マーク・カーランスキー(小林朋則 訳)『非暴力 武器を持たない闘士たち』ランダムハウス講談社 二〇〇七年八月 一六頁

⑰ この章において、タミコ以外の登場人物は初出時から全て**と表記されている。なお、英訳時にはスミンキーによって被害少女を「」に、被害少女の中心人物を「Mina」と個性性が与えられている。なお、韓国版(全지연(孫知延)訳 글너림출판사 二〇一八年四月)では**のまま翻訳されている。

⑱ 注⑥に同じ 一八九頁

⑲ 浅野千恵「(無)意味と暴力」『現代思想』第二八巻第二号 青土社 二〇〇〇年二月 一八四～一八五頁

⑳ 注⑥に同じ

㉑ 注⑧に同じ

㉒ 注⑫に同じ 三五頁

㉓ 岡野八代「慰安婦」問題と日本の民主化」『戦争に抗する——ケアの倫理と平和の構想』岩波書店 二〇一五年一〇月 傍点は本文ママ

㉔ 目取真俊『虹の鳥』影書房 二〇〇六年六月発行

②⑤ アルフォンソ・リンギス(水野友美子・金子遊・小林浩二 訳)「栄光におぼれる」『暴力と輝き』水声社 二〇一九年五月

②⑥ ジュデイス・バトラー(本橋哲也 訳)「解釈と免責 私たちが聞くことのできるものとは？」『生のあやうさ 哀悼と暴力の政治学』以文社 二〇〇七年八月 四二～四三頁

②⑦ ジュデイス・バトラー(本橋哲也 訳)「暴力・哀悼・政治」『生のあやうさ 哀悼と暴力の政治学』以文社 二〇〇七年八月 七二頁

②⑧ 新城郁夫「掟の門前」に座り込む人々——非暴力抵抗における「沖繩」という回路」『沖繩に連なる——思想と運動が出会うところ』岩波書店 二〇一八年一〇月 一四四頁

②⑨ 目取真俊「希望」『目取真俊短編小説選集三 面影と連れて』影書房 二〇一三年十一月

(論中の本文引用は、『眼の奥の森』影書房 二〇〇九年五月に拠った。断りのない限り、論中の傍点は論者による。本論は、第七回 東アジアと同時代 日本語文学フォーラム二〇一九台北大会(二〇一九年一〇月二五～二七日 於台湾政治大学) 次世代フォーラム内での発表、「反響する(悲鳴)」と記憶——目取真俊『眼の奥の森』論』の予稿および発表原稿を基に大幅に加筆を行ったものである。)

(本学大学院博士後期課程)